

連載 **そこが聞きたい圭三対談** 43**ブラジルが生んだ**

画 家

ゲスト **マベ・マナブ**

「日本人は閉鎖的だ」というマベさん

圭三 ちは、ずいぶん苦勞したんでしょね。
マベ ブラジル人の大耕地をファゼンダというんですが、ファゼンダにまわされて、苦勞したすえ、夜逃げしたという話をたびたび聞きましたよ。

圭三 いちばん、苦勞したのは、何だったですか。

マベ 僕は子供でしたから、経済的な苦勞はわかりませんでした。

圭三 お父さんが苦勞したでしょう。

マベ 親父は、一言もグチをこぼさなかったんです。僕は子供ながら見事だと思いましたが、おふくろは、こんなに苦勞するんだったら、なにもブラジルまで来ることはなかったんじゃないかと、よくグチをこぼしていました。たとえば、電気がないんですよ。石油ランプなんです。夕方になると、皮膚がまだブラジ

ルに馴れていないんで、ブヨがまっ黒になるほどたかるんです。

圭三 ブラジル人の顔には、ブヨはたからないんですか？

マベ 馴れていると気にならないのでしよう、平気なんです。ブラジルへ行ったらばかりのころは、先が見えないくらいブヨが来るんですね。しゃべっているところの中にも入っちゃうんですよ。

圭三 一人でも多く働き手が欲しい状況だったと思うんですが、マベさんもお父さんと一緒に働いたんでしょう。

マベ 勿論。ですから、学校は夜学校に行きました。

圭三 日本人学校に行ったんですか。

マベ ええ。日本人は偉いもんです。

当時から、日本人学校も、ブラジル人学校も日本人が作っていました。立派なレシガ造りの学校を建て、ブラジル人の教師を招き、ブラジルの教育を受けさせるんですよ。なおかつ日本語のできる人を呼んで、日本語を教えさせる。サンパウロ市から六百キロぐらい山奥で、ワニや毒蛇のいるようなところで……。

— マベ・マナブ —

大正十三年熊本県不知火村に生れる。昭和九年ブラジルへ移住。二十四年父の死後土地を購入し農園を経営。三十二年農園経営に失敗。画家に転向。三十四年サンパウロ・ビエンナーレ、パリ青年ビエンナーレで最優秀賞を受賞。三十五年ブラジルに帰化。現在、欧米各国で個展を開き活躍中。

圭三 日本人というのは、どこへ行っても教育熱心なんですね。日本人が持っていた農園は、どれくらいの広さなんですか。

マベ 最低十アルクウェルですね。一アルクウェルは、ヨコ百十メートル、タテ二百二十メートルなんです。奥地へ行けば行くほど、規模は大きくなります。

圭三 あまり奥地へ行くと、労働力がないでしょう。

マベ その土地の人間を使うんです。

圭三 ブラジル人を？

マベ そうです。だから、亡くなった三島由紀夫さんがブラジルが気に入ったのは、アメリカへ行くと、日本人がアメリカ人に使われているような感じだけども、ブラジルでは、日本人がブラジル人を使っているからだと言っていました。僕も農園を経営していたころ、ブラジル人の四家族を使っていましたからね。

父の遺言に背いて

圭三 それじゃ、マベさんは移民という精神的なコンプレックスだとか、苦勞というものはなかったでしょう。

マベ それはぜんぜんないです。日本人は、ブラジルで非常に買われているんですよ。奥地の発展に貢献したのは、日本人ですからね。